



み教えの伝播について

宇野 恵 教（うの えきょう）

価値観の多様化がさらに進み、ますます混迷を深め複雑化していく今日の社会にあって、浄土真宗の^{もんぼう}聞法や伝道のありかたは、どのように変化し、どのように推進されていくべきなのでしょう。

宗祖聖人の御本典「真仏土文類」には、『大般涅槃経』が引かれ、「随他意説」「随自意説」「随自他意説」という、いわゆる如来の三語が説かれています（『註釈版聖典』三五五頁）。これは、『涅槃経』の中心テーマである「一切衆生悉有仏性」の教説と、わたしたち衆生の各々が^{たりにきえこう}他力回向の信を得ることによって^{あんにもう}安養の浄土に往生し^{ぶつが}仏果を証するという、浄土真宗のみ教えとの関係について詳しく説き示すための御引用であると思われます。

「随他意説」「随自意説」「随自他意説」の三つは、仏の衆生に対する説法の形式、あるいは^{きょうぼう}教法の^{でんぱ}伝播のあり方についての三段階を示したものです。

「随他意説」とは、仏から見た他者、すなわち個々の衆生の意向に^{したが}随って法を説くということで、いわゆる^{ほうべん}方便の^{ほうもん}法門を意味します。相手の個性や好みに応じて、いわば一対一の対話の形式で法を説くのですから、その伝播の範囲は限られたものとなり、真実の法義が広くゆきわたるとは言えません。したがって、ここの経説の文にも、仏性に関して、たとえ^{だいじゅうじ}第十地まで登りつめた菩薩であっても、自らは無上の仏果を得ることを知っているのに、一切衆生がみな自分と同じ無上の仏果を得ることまでは知らないから、仏性について部分的にしか知らない菩薩であると、いわれています。

これに対し、「随自意説」とは、仏自らの意に随って説かれる法門のことです。仏は自らの智見によって「一切衆生悉有仏性」と常に^{せんぜつ}宣説されるのです。説法の形式としては、真実を知る一人の人が多くの他者に向かって語る一対多のマスメディアの形式といえるでしょう。

これは、浄土教における真実の法門すなわち念仏の法門を意味します。法然聖人は、『^{せんじやくしゅう}選択集』「^{ねんぶつみぞく}念仏付属^{しょう}章」において、^{じょうさんしよぎょう}定散諸行は随他意方便の法門として^{しばら}暫く説き、念仏は随自意真実の法門としてひとたび開かれれば永く閉ざされることはない、と明示されます（『浄土真宗聖典』「七祖篇」一二七三～四頁）。定散諸行を廃し、念仏の法門を立てるために、この随他・随自の語を用いられるのです。

法然聖人がお示しになるのはここまでで、次の「随自他意説」は採用されません。その理由は、^{てんだいだいしちぎ}天台大師智顛が『^{まかしかん}摩訶止観』や『^{ほっけげんぎ}法華玄義』において、この『涅槃経』の文を解釈されるごとく、「随自他意説」は、「随他意」の方便から「随自意」の真実に至る中間に位置し、両方が同居している状態をいうのであって、必ずしも採用する必要のない法門であるとみなされたからであると思われます。

しかし宗祖聖人は、この「随自他意説」を、第二の「随自意説」よりも、さらに普遍的な法門であると見られて、経文を引用しておられると考えられます。普遍的というのは、「我はこう説く」「^{なんじ}汝の意もまたそうであ

ろう」といわれているように、広く説かれるばかりでなく、衆生の心の底まで至り届いた教法であるという意味です。仏性に関しては、「一切衆生悉有仏性」であることは間違いないが、煩惱に覆われている故に、衆生がそれを見ることができないのだ、といわれます。

宗祖が、この第三の「随自他意説」を、最も重視しておられると思われる理由は、この「真仏土文類」の結積の文に、御自釈を示され、

感染の衆生、ここに^{しやう}性を見ることあたはず、煩惱に覆はるるがゆゑに。

(『註釈版聖典』三七一頁)

と述べられ、再び『涅槃経』を引かれて、続いて、

ゆゑに知んぬ、安樂^{あんらくぶつこく}仏国に到れば、すなはちかならず^{あらわ}仏性を顕す。本願力の回向によるがゆゑに。

(同上)

と示されていますが、これが随自他意の法門に基づいておられると考えられるからです。つまり、すべての衆生がことごとく仏性を有するには違いないが、衆生は煩惱に覆われているから、この世で仏性を見ることはできず、本願力の回向によって安養の浄土に生まれた後、必ず^{かいげん}仏性を開顕する、といわれるのです。

随自他意の法門の精神は、伝道の形式としては、多対多のネットワークの形式であり、私たちの教団が長く提唱してきた「全員聞法・全員伝道」の精神であると思います。つまり浄土真実の法門をいただくわれわれ門徒ひとりひとりが、互いに情報の発信者となり受信者となって、ともにご法義を伝えていこうということです。

ご門主様は、このたびの「親鸞^{だいおんき}聖人七百五十回大遠忌^{たいおんき}についての消息」の中で、「現代社会^{こた}に^{こた}応える宗門を築きたい」と仰せになり、「そのためには、人びとの^{なや}悩みや^{かい}思いを受けとめ共有する広い心を^{やしな}養い、互いに支え合う組織を育て、み教えを伝えなければなりません」と仰^{おっしゃ}っています。このお言葉は、これからの伝道教化の指針を示されたものであり、み教えが伝わっていく基盤として、人びとと共有し得る広い心と、互いに支え合える組織の構築を、提唱しておられるのだと思います。

(司教)